

氏 名 (本 籍)	大 原 詠美子 (愛知県)
学 位 の 種 類	博士 (文学)
学 位 記 番 号	博課第362号
学位授与年月日	平成20年 3 月24日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間文化研究科
論 文 題 目	ルイ14世治世下の南フランスにおけるカトリックと プロテスタントの対立
論文審査委員	(委員長) 教授 山 辺 規 子 教授 渡 辺 和 行 教授 小 山 俊 輔

## 論文内容の要旨

本論文は、「一つの信仰、一つの法、一人の王」という理念のもと、それまで1598年にアンリ 4 世によって発布された「ナント王令」によって容認されてきた宗教的な寛容政策が廃されるルイ14世治下、プロテスタント勢力が優勢であった南フランスの低ラングドック地方において勃発したプロテスタントの反乱「カミザール戦争」を中心に、近世南フランスにおける複雑な宗教状況を明らかにしようとした論文である。本論文は、下記のように、カミザール戦争勃発までの宗教状況を取り扱う第1部と、カミザール戦争そのものの経過と戦後の状況を取り扱う第2部という二部構成からなる。

### 序章

第1部 ルイ14世親政開始からカミザール戦争の勃発まで (1661～1702年)

第1章 ナント王令廃止とプロテスタント抑圧策の適用

第2章 プロテスタントの対応

第1節 「避難」

第2節 改宗—Nouveaux Convertis—

第3節 「頑固者たち」の抵抗

第3章 カトリックの対応

第1節 17世紀の教区における諸問題

第2節 カトリック教化活動

第3節	教育の整備
第4章	カトリック教化活動の成果と諸問題
第1節	カトリック教化活動の成果
第2節	カトリック教化活動における諸問題
第2部	カミザール戦争勃発から終息まで（1702～1710年頃）、そして戦禍からの復興
第1章	カミザール戦争の経過と背景
第2章	対立の表面化—武装蜂起によるプロテスタントの抵抗—
第1節	預言者たち
第2節	カミザールの「敵」と「味方」
第3章	対立の表面化—カトリックの参戦—
第1節	対プロテスタント政策へのA.C.の動員
第2節	その他のA.C.武装集団
第3節	カトリック聖職者たち
第4章	プロテスタントの復興
第5章	カトリックの復興
第1節	カトリック教化活動の再開
第2節	カトリック教化活動の再開における諸問題
第3節	カトリック教化活動の成果
第4節	カトリック教化活動の方向転換と民衆社会における変化
終章	

以下、本論文の流れに沿って、内容をまとめる。

まず序章では、近世フランスの宗教的対立、特にプロテスタント迫害が持つ意味に関する研究史をまとめたうえで、本論文の目的が、プロテスタントが多数を占め、カミザール戦争が勃発した南フランスの民衆社会で絶対王政の宗教政策がどのように受けとめられ、どのような結果をもたらしたのかについて明らかにすることとされる。

第1部第1章は、ルイ14世の宗教政策を概括し、竜騎兵による強制改宗、プロテスタント教会取り壊し決定など強権的な政策が南フランスにも適用され、在地コミュニティに打撃を与えたことが指摘される。

第2章は、ルイ14世の強硬策に対するプロテスタントの対応を、国外脱出、改宗、国内における抵抗継続に分けて論じる。従来、プロテスタントの対応でもっとも注目されたのは、経済的にも文化的にもフランスに打撃を与えたとされる国外脱出であり、ここでもフランスおよび脱出先におけるプロ

テスタントが持つ意味がまとめられている。一方、国内にとどまった者は、形式的にはすべて改宗したことになるが、その実態は複雑である。すなわち、まさしくカトリックに改宗しカトリックとして位置づけられる者がいる一方、形式的に改宗しているが実態としてはプロテスタントである者、いったんはカトリックとなったが再びプロテスタントに戻ってしまっていることが明らかな者がいるからである。このように信仰に疑いをもたれている「新改宗者 Nouveaux Convertis (N.C)」と、さらに明確に改宗を拒否した者と合わせて、カトリックによる信仰統一を図ることの難しさが示される。

この難業にいかに取り組み、その成果がどうであったかが考察されるのが、第3章、第4章である。特にここでは、在地の教区で司牧にあたってきた聖職者と新たに派遣されてきた聖職者の活動に焦点をあてながら、長期的な視野から子女に対するカトリック教育を通じてカトリック教化の活動がおこなわれたことが実証的に示される。実際には、もともとカトリックの聖職者のなかには十分な司牧能力を持たない者もいたうえに、カトリック聖職者の中でもさまざまな修道会、コンフレリーによって対応が異なり、教区の聖職者と新たに中央から派遣された聖職者との間にも意見の対立が存在したために、カトリック聖職者として一致団結した教化活動がなされたわけではなかった。また、考察対象となっている地域は、地理的にも山岳地帯でそれぞれのコミュニティが孤立傾向にあるうえに、長年にわたるカトリック・プロテスタント共存状況が生み出す独特の仲間意識と対立意識が混じった状態にあったので、カトリックの教化活動は短期的に成果を上げたとはいえなかった。その中で、地方長官とカトリック教化運動の指導者がより強権的な行動に出ることによって、宗派間の緊張は高まり、ついには大きな反乱がおきるありさまが描かれる。

第2部は、まさに反中央、反カトリックの動きが軍事蜂起の形でしめされることになるカミザール戦争勃発から鎮圧、そして戦後のカトリックとプロテスタントの復興運動を取り扱う。

カミザール戦争は、神からの啓示を受けたという預言者の預言に導かれたプロテスタントが、迫害を主導していた聖職者を殺害したことに始まる。抑圧に対する憤懣が吹き出した形で一気に一帯に広がった反乱は、武力という面からは圧倒的に不利であるにもかかわらず、住民の支援をうけて、2年間続くことになる。この熱狂的に燃え上がった反乱は、それまで両派が共存していた地域においても対立を生み、カトリック系住民がさまざまな形で武装集団を形成し、叛徒のみならず一般のプロテスタント系住民をも攻撃対象としていったことにより、地方一帯に暴力と無秩序が蔓延することになった。第2部第1章から第3章までにおいては、後世まで残虐な攻撃の記憶を残すことになった反乱であるカミザール戦争の過程で、反乱の指導者たる預言者、一般のプロテスタント住民、カトリック系住民、カトリック聖職者がどのような行動をとったかが、具体的に語られる。

第4章、第5章は、戦争によって荒廃したセヴェンヌ地方、低ラングドック地方におけるプロテスタント、カトリック両派のその後を追う。まず第4章では、プロテスタントのその後が考察される。反乱は鎮圧されたとはいえ、大きくその存在を誇示したプロテスタントに対して、政府もカトリック

もあえて積極的に抑圧しないかたちをとった。そのため、非合法であるプロテスタント礼拝集会は各地でおこなわれ、さらにナント王令廃止後初めてのプロテスタント系牧師の全国会議がこの地域で開催された。単発的な迫害をうけることがあったとはいえ、原則として非暴力の立場から非合法な中で信仰を貫き、やがて寛容令（1787年）によって信仰を認められることになったプロテスタントは、18世紀以降現在にいたるまで低ラングドック地方に残る迫害の跡を、自らの抵抗の集団的記憶を伝えるものとして扱っていることが指摘される。

一方、カトリックは、プロテスタントの改宗、および反乱の間に暴力行為に走ったカトリック信徒の教化のためにより徹底したカトリック側の改革の必要性を自覚し、よりいっそうカトリック教化に努める。第5章では、カトリック宣教師がおこなったさまざまなタイプの説教、在地出身のよりよき聖職者の育成、カトリック諸団体による教育の普及、コンフレリー活動の拡大などが具体的に上げられながら、その成果の意味が示される。

終章では、ルイ14世時代から18世紀にかけてのフランスの宗教のありかたを全体として見渡したなかで、カミザール戦争、そしてセヴェンヌ地方および低ラングドック地方が占める位置を問い直す。カミザール戦争勃発以前、中央から離れて独立心が強くプロテスタント優勢であった地方においては、在地のカトリック聖職者のレベルは低く、権威を持たない一方、プロテスタントはかなりの影響力を行使し、社会ではカトリック・プロテスタントが共存していた。このような状況に対して、中央政府は、プロテスタント迫害とカトリック教化運動を強力に押し進めたが、その結果がカミザール戦争の勃発であり、宗教的混乱であった。戦後、荒廃した地方における信仰再建をめざす動きは、18世紀のフランスにおいて全国的にみられた信仰への希薄化の傾向とは逆に、カトリックにせよ、プロテスタントにせよ宗教的な復興運動の盛り上がりという傾向を生むことになるが指摘される。

以上のように、本論文は、絶対主義王政期にフランス国家教会主義（ガリカニズム）を推し進めたとされるルイ14世の治世下において、プロテスタントが強固にその信仰を堅持した地方における民衆の宗教に対する姿勢を実証的に示し、その特徴を浮かび上がらせることによって、従来の研究では見過ごされがちであった側面を示した論文であるということができる。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、「ナント王令」の廃止によって、たとえプロテスタント追放による経済的な打撃があるにしても、「一つの信仰、一つの法、一人の王」というスローガンのもと国家教会主義（ガリカニズム）を推進したとされるルイ14世治下において、南フランスの低ラングドック地方において勃発したプロテスタントの反乱「カミザール戦争」に注目して、民衆の社会ではプロテスタントが抵抗勢力として生き残っており、カトリックにおいてもさまざまな改革運動、教化運動が繰り広げられたことを示した論文である。

まず評価すべきなのは、さまざまな史料を駆使して語られる実証性である。未刊行史料を含めて多くの史料を利用し、地方のコミュニティにおいて単純にプロテスタントとカトリックが対立しているというのではなく、プロテスタントとカトリック間の通婚が珍しくなかったことや、戦争中の混乱の中でプロテスタントを助けるカトリックがいたこと、逆にそれぞれの宗派内においても属する集団によってかなり深刻な対立があったり、カトリック信徒がカトリック勢力によって殺されたりするなどの複雑な様相を呈していたことが具体的に語られ、民衆の実態に迫りたいとする著者の姿勢をよく示しているといえよう。

次に、近世のフランスのプロテスタントに関する研究史を十分に踏まえながら、自分なりの立場でカミザール戦争を位置づけていることも評価できる。ナントの王令廃止後のフランスのプロテスタントについては、しばしば国外に逃れたプロテスタントの動きに焦点があてられ、プロテスタントの活動の国際的な広がりの中に位置づけられるか、あるいは信教の自由につながるものとしてフランス革命前夜の寛容令にいたる過程を追うなかでとりあげられてきた。カミザール戦争もまた、プロテスタント史家が自らの苦難の歴史を語るなかで、取り上げられてきた。これに対して、著者が第三者の立場から、国内にとどまったプロテスタントのありかたを1世紀にわたって追いつけ、プロテスタントにとどまらず、カトリックの働きかけにも十分に配慮していることは、著者のオリジナリティとして評価できる。

実際のところ、ルイ14世治下のフランスの宗教をめぐる問題は、ローマ教皇との関係、ジャンセニストの動きなど、本論文にはあまり触れられていない問題も多い。このような教会の体制に関わる問題、教義の問題は、各種の聖職者団体のありかたを左右する問題ともなるので、このような問題の検討もまた望まれる。

さらにルイ14世の宗教政策に対する各地の動きはさまざまであり、宗教的にも地方の特性から言っても反中央的な性格を持つ南フランスのような地方に対して、一見カトリックでまとまっているよう

な地方における民衆の反応も、比較対象として有効である。最後に著者自身が語っているように、18世紀半ば以降にフランスにおいて全国的に教会離れ、信仰の希薄化の傾向があったとすれば、それを特徴的に示す社会と本論文で取り扱った南フランスにおける信仰の復興がみられた社会と総合的に考察することによって、近世フランスの民衆社会における信仰の持つ意味が明かになると思われる。

特に、本論文ではコンフレリーの活動の活発化が信仰復興の特徴としてあげられているが、兄弟会とも信心会とも訳されるコンフレリーは、もともと俗信徒による相互扶助的団体であり、どのような活動をしているかを具体的に検討することによってはじめて、宗教活動の活発化の主体として取り上げられるといえよう。本論文では、たとえばイエズス会がコンフレリーの指導に当たったことや、司祭のための信心会のドクトリネールの活動が紹介されており、その活動に対して一定の配慮がなされている。しかし、コンフレリーを考察の中心に据えると、さらに広い活動を考慮しなくてはならなくなると思われる。

コンフレリーが、民衆が日常的に参加するカトリックの活動集団であるとすれば、プロテスタント側もまた民衆の取り込みに対して、民衆に接近するかたちでの説教や布教活動をおこなったと思われる。本論文は、既にプロテスタントが定着しているにもかかわらず禁令の対象となった時代の低ラングドック地方、セヴェンヌ地方における民衆の宗教状況を取り扱っているが、そもそもこの地域がなぜプロテスタント優勢になったのか、その布教はどのような形でおこなわれたのかを明らかにし、ほかのプロテスタント化した地方で辺境に位置する地域の民衆のありかたと比較、あるいは他地域とのつながりのありかたを考察することによって、このカミザール戦争をおこした人々の宗教文化を興味深く取り扱うことが可能である。その意味で、この地域の民衆の宗教問題に関してまだ解明すべき課題は多い。

一方、本論文は、フランスの地方史研究という面からも評価することができる。カミザール戦争の主たる舞台となったセヴェンヌ地方、低ラングドック地方は、これまで日本においてはあまり注目されることがなかった南部の山岳地帯である。しばしば脚光をあびる大諸侯支配地域、あるいは経済的に繁栄した都市をもって、フランスの「地方」が語られてきたが、さまざまな意味で「周辺」と見られがちであった「地方」が歴史的にどのような特性を持っていたかを示すことは、フランスという国家を複眼的に考察するのに役立つ。本論文では、当時の行政区分、司教管区などの地域区分のデータや地域コミュニティの性格が示されており、地域支配の体制を読みとることができる。

そのうえで、18世紀末における経済状態などの考察があり、トゥルーズやマルセイユなど南フランスにある支配の中心都市とどのような関係にあったかが示されていれば、このカミザール戦争がもつ経済的意義、さらに国王にとっての「地方」支配の中での反乱地域が持つ意味が複合的に読み取れたであろう。特にこの反乱が起きた時期は、ルイ14世にとってはスペイン継承戦争の時期にあたる。対外的に難しい局面にあった国王にとって内政問題への適切な対応を求められながら、必ずしもそれが

容易ではない時期であったことを考え、地方と中央との関係だけではとらえられない面があることは考慮されるべきであろうと考えられる。

以上のように、本論文にはまだ課題として残されている点も多いが、文章にも破綻がなく研究史をきちんと踏まえ、自らの視点をはっきりとさせながら実証的に史料を駆使して論を展開している論文として十分に評価できる。

なお、本論文のうち、カミザール戦争に関する第2部第1章、第2章は、著者が修士論文において展開したものであり、その主要部分は『寧楽史苑』第49号（2004年）で公表している。また、第一部は、申請者がフランスのモンペリエ大学に提出した論文・《Les relations entre les catholiques et les protestants dans les Cévennes sous le règne de Louis XIV —La mission et ses résultats.—》，mémoire de Master, Université Paul-Valéry Montpellier III, 2005.（「ルイ14世治世下のセヴェンヌにおけるカトリックとプロテスタントの関係—カトリック教化とその結果」）に基づくもので、『奈良女子大学人間文化研究科年報』第22号（2006年）及び『キリスト教史学』第61集（2007年）の2ヶ所に分けて公表している。

特に『キリスト教史学』において公表した部分は、キリスト教史学会第57回大会において学会発表をおこない、その結果を受けて学会誌掲載が決定されたものである。また、2008年5月に開催される日本西洋史学会第58回大会において本論文を踏まえて、主としてカトリック教化活動に関する報告をおこなうことが決定されている。日本西洋史学会大会における発表は、関西フランス史研究会、近代社会史研究会などで既に報告をおこない、絶対王政期のフランス史研究者からも一定の評価を得たことをうけてのものであり、申請者の研究が学界において期待される研究であることを示している。

著者が留学中に在籍したモンペリエ大学においては、南フランス近世宗教史の専門家が論文指導にあたり、ゼミにおいてもフランス人に混じって未刊行史料などを読みこなしており、その研究姿勢はフランス人学生に対する刺激となっていたとの評価を得たことが伝えられている。この評価にもみられるように、本論文は、南フランス各地の文書館の未刊行文書を利用し、それを史料として読みこなしたうえで書かれたものであることは高く評価できる。文書館に保存されている同時代文書は、当然ながら17-18世紀のフランス語、場合によって南フランス方言であるオック語で書かれており、現代の標準的なフランス語とは異なる。さらに手書きの文書の読解には一定の古文書学の知識と能力が必要であり、このような文書を読み、それを史料として用いることには高度な専門性が求められることであるといえる。本博士論文がこのような古文書を使用していることは、本博士論文のオリジナリティが日本においてはもちろんのこと、フランスにおいても評価されることを示している。

さらに、フランスの専門家によってその読解能力を保証されたことにより、今後著者が近世フランス史の専門家として活動する能力があるといえよう。留学中には、本論文で取り扱った低ラングドック地方の各地域を自らの足で丹念に回り、その地域的特性をしっかりと把握したうえで、中央から派遣

されてきた官僚、聖職者に対する反乱が持つ意味を考察しようとした姿勢も高く評価されるべきもの  
と考える。実際のところ、この地域の民衆はその名前の発音すら確定するのが難しく、本論文にも苦  
労のあとが伺える場所が散見された。また、この地域が山岳地帯に属することは、物理的にも簡単に  
アプローチできない思いを抱かせる。このように外国人が研究対象として取り上げることはさまざま  
な意味で乗り越えねばならない課題がある地域の歴史をよく理解しながら、高度に実証的な論文をま  
とめたことは特筆すべきことである。

したがって、本審査委員会は、本申請論文が、奈良女子大学博士（文学）の学位を授与されるのに  
十分な内容を備えていると判断する。